

B—73 群馬県における被服実態調査（その1）
—昭和29年および同39年の被服実態調査の比較—

群馬大教育 金子 冨美

1. 家政科被服教材選定の参考資料および被服管理の方向を知るため、群馬県下の被服実態調査を昭和29年と同39年に行なったので兩年の調査結果の比較検討を試みた。

2. (1)調査方法。第1回は本学学生を通じ群馬県内居住者を対象として調査用紙548枚配布し回収433枚中不備を除き382枚が集計対象となった。回収率79%。第2回は本県内の中学、高校、大学の所在地の地域的特色を考慮して7校選び調査用紙1,015枚配布。回収869枚中800枚が集計対象となった。

回収率86%。A～Fのグループに分け、(A 0～5歳、B 6～15歳、C 16～22歳、D 23～29歳、E 30～59歳、F 60歳以上)第1回は群馬県人口の約4,000分の1、第2回は約2,000分の1の割合であった。(2)調査内容。①和洋服所持数。仕立の状況。材料の種類。活用状態。②付属品の所持数。材料その他。③寝具の所持数。仕立の状況。材料の種類。充填材料の種類。活用状態。④和、洋服利用状況など。

3. 10年経過後の被服所持数の変化は平均1人29年度71.2枚。39年度84.2枚となり、13枚増加し、活用状態は91.3%から94.4%となり、死蔵が2.5%減少した。和、洋服相互の持数には相関なく、仕立は和、洋服共に種類により家庭、注文、既製の比率はそれぞれ異なるなど、その他の考察によりこの10年間の推移の状態その変貌の要因は将来の家庭科教育へなんらかの示唆をなすものと考えられる。